

「マハティールの都市」クアラルンプル
 —生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ—

Kuala Lumpur as “Mahathir City”:

Production of Its Spectacular *Tourismscape*

藤 卷 正 己

要 約

本稿では、クアラルンプルの旧英領植民地都市からトランスナショナル都市へのランドスケープの変容過程を素描しつつ、政治社会地理学的観点から、それがツーリズム空間の拡大・深化の、いいかえれば「ツーリズムスケープ」の生成過程でもあったこと、そして過去20年間の景観変容がいかに第四代首相マハティール・ビン・モハマドによる企図の空間的实践の結果であったかについて言及する。

Abstract

This article aims to trace the transformation process of landscape of Kuala Lumpur from as the colonial capital of British Malaya to as present transnational city in 50 years and try to read meaning in them from the view point of politico-social geography. The author, furthermore, refers that drastic transformation process of built-environment and landscape of Kuala Lumpur in past twenty years has accompanied production of tourism space and *tourismscape*, and has reflected the practice of space on the basis of visions by Mahathir, the fourth prime minister of Malaysia.

キーワード : クアラルンプル マハティールの都市 ワールドクラス・シティ、
 美化政策 スペクタクルなツーリズムスケープ

Key words : Kuala Lumpur, Mahathir City, World-Class City, Beautification
 Projects, Spectacular *Tourismscape*

1. はじめに

独立記念日にあたる8月31日、毎年マレーシアの新聞各紙は同国の来し方を回顧し、行く末を展望する記事特集を組む。それらを通じて、この国の成り立ちや現状を知り、そして政府指導者により未来がどのように構想されているのかを俯瞰することができる。

1957年にマラヤ連邦として英国より完全独立を果たしてから45回目の独立記念日を迎えた2002年8月31日、*New Strait Times* 紙に一面を使って掲載された特集記事は、景観の読み解きを通じて、首都クアラルンプルの都市的経験に関心を払ってきた者にとって心惹かれるものがあった。それは、Jennifer Gomez 署名による「From tin town to tower city (錫鉱山の町からタワー・シティへ)」と題する軽快なエッセイであったが、密林に覆われた未開の地から熱帯のメトロポリスへと変貌するに至った過去150年間の移り変わり、地理-歴史 (geohistory) の躍動を簡潔にまとめあげた「クアラルンプル百五十年小史」とでもいべき内容のものである。

本稿ではまず、この新聞記事の内容を紹介しながら、クアラルンプルの旧英領植民地都市からトランスナショナル都市へのランドスケープ (landscape = 土地景観) の変容過程を素描する。そして、それがクアラルンプルというツーリズム空間の拡大・深化の、いかえれば「ツーリズムスケープ」 (tourismscape = ツーリズム景観) の生成過程でもあったこと、そして過去20年間の景観変容が、いかに第四代首相マハティール・ビン・モハマド (Mahathir bin Mohamad, 首相任期: 1981年7月~2003年10月) による企図の空間的实践の結果であったかについて言及したい。

2. 変貌するクアラルンプルのランドスケープ

(1) *From tin town to tower city*

KLはコロニアルな建物とモダンな摩天楼とによって特徴づけられる。こうした風景は、この街が辺境の植民の地からモダンなコスモポリタン・シティへの変遷の物語を伝えてくれる。

以上のような前文で始まるこの記事は、ムーア様式の意匠をほどこしたKL鉄道駅界限や、今もなおKLのランドマークの一つとなっている旧植民地政庁スルタン・アブドゥル・サーマッド (Bangunan Sultan Abdul Samad) ビルの時計台が偉容を放つムルデカ (Merdeka = 独立) 広場やチャイナタウンが広がるKLの歴史的核地区、そしてチャイナタウンの東に位置するムルデカ・スタジアムとその周辺部を鳥瞰した新旧対照の3組の写真を併載し、KLの風景の変わりようを伝えながら、この熱帯のメトロポリスの確かな成長を礼賛している。ちなみにKLとは、マレーシアの首都クアラルンプルの、KLっ子 (KL-lite) にとっての「場所愛」^{トボフィリア}をこめた略称である (以下クアラルンプルをKLと略称する)。

さて、同記事を要約すれば、おおよそ以下のようなだろう (以下の注記と写真は筆者による) (図1)。

1800代半ばに英国の錫鉱石採掘の一拠点としてクラン川とゴンバック川の合流地点という、いたって平凡な場所に興ったKLは¹⁾、アジアの中でもっとも繁栄しているコスモポリタン・シティの一つへと発展してきた。

人口180万人のKL²⁾は、その他のアジア諸国と違って、旧植民地期の古い建物群と近代的な新しい高層建築群とが完璧な調和をもって存在する都市である。それは辺境の植民地集落からモダンなコスモポリタン都市へと変遷したことを物語っている。

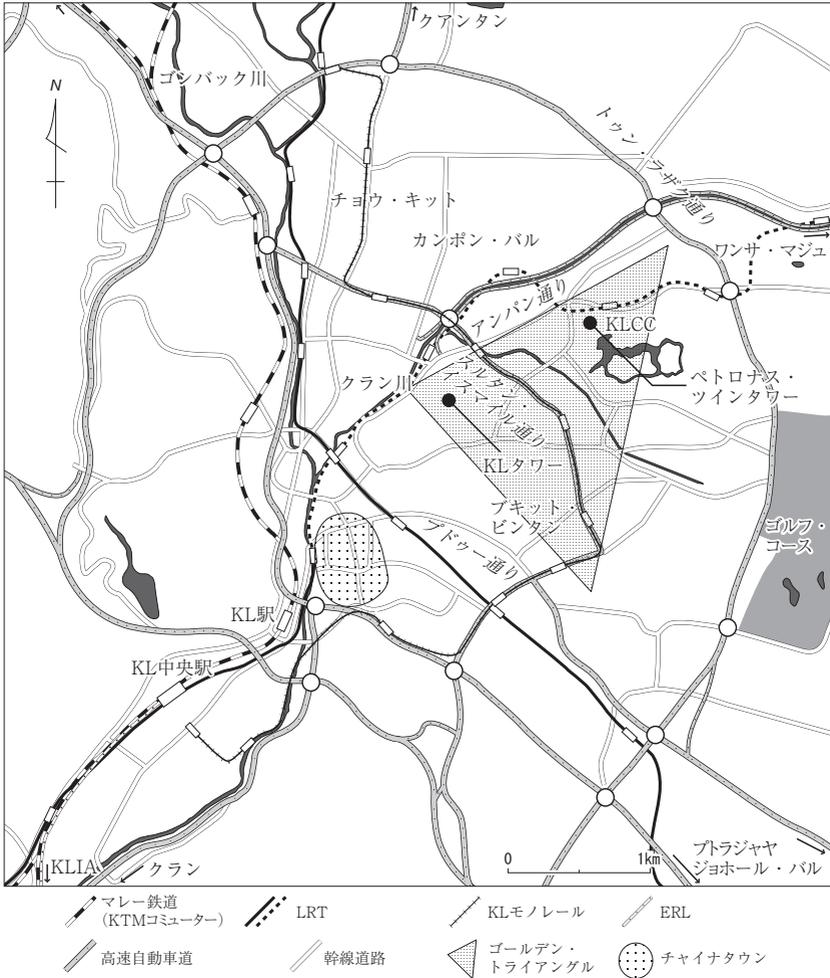


図1 クアラルンプル市街地概観図(近藤暁夫作図)

たとえば、植民地時代の建造物としてもっとも異彩を放つ二つの建物、ロイヤル・スランゴール・クラブ (Royal Selangor Club)³⁾ とスルタン・アブドゥル・サーマッド・ビル⁴⁾ (写真1) は、今なお良く知られた歴史的建造物として残っているし、他方では KL タワー⁵⁾ と世界的に有名なペトロナス・ツインタワー (Petronas Twin Tower)⁶⁾ (写真2) は、今やこの街のランドマークとなっている。

今日、世界的に有名になり、賞賛されているツインタワーはマレーシアの進歩をも象徴している。アメリカ人建築家 Cesar Pelli がデザインしたこの建物には、イスラム建築によく使われている幾何学模様⁷⁾ が取り込まれている。そして入り口のデザインは、伝統的な手工芸の木工彫刻とこの国の伝統的な様式が採り入れられている。

また…KL市街地南のパンタイ (Pantai) 地区に位置するムナラ・テレコム (Menara Telekom)⁸⁾ は、マレーシア・テレコム社の本社が入る IT オフィスとして高く評価されている。その建物は、天空に伸びる若竹の茎を象徴しており、KL のもう一つのランドマークとなっている。

鋼とガラスのしゃれた建造物が、ゴールデン・トライアングル⁹⁾ の空を背景にしてそそりたっている。その界限は、繁華なビジネス街であり、多国籍企業や金融機関が集まっている。また市内には、世界各地で展開しているホテルや国際水準のショッピング・モールが建ち並んでいる。それと同様に、民族的飛び地ともいえるプタリン通り (Jalan Petaling)¹⁰⁾ (写真3) とマシジッド・インディア (Masjid India)¹¹⁾ (写真4) が、マレーシアで調和しながら暮らしているさまざまな民族の色彩りをただよわせている。

クアラルンプルの旧き時代の魅力を垣間見るべく街中をドライブしてみると、古い木造二階建ての華人のショップ・ハウスや、市内では数少ないマレー人集住地区の一つであるカンボン・バル (Kampung Baru)¹²⁾ (写真5) ではマレー風の田舎の家々を見たりすることができる。[中略]

我々の成功と進歩は非常に効率のよい鉄道輸送システムをみてもわかる。



写真1 スルタン・アブドウル・サーマッド・ビル (2003年1月14日撮影)



写真2 ペトロナス・ツインタワー (2007年9月10日撮影)



写真3 プタリン通り (2004年1月22日撮影)



写真4 マシジッド・インディア (2003年10月24日撮影)



写真5 カンボン・バル (2004年1月18日撮影)



写真6 モノレール (2008年8月28日撮影)



写真7 Star-LRT (2004年1月22日撮影)

この都市の交通混雑を十分に緩和しているのはまちがいない。インド人の文化遺産で有名なブリックフィールズ (Brickfields)¹³⁾ は、今や急速に繁栄を謳歌している。クアラルンプル中央駅 (KL Sentral)¹⁴⁾ が、鉄道の結節点として KTM コミューター¹⁵⁾ や ERL (Express Rail Link)¹⁶⁾、モノレール (KL Monorail)¹⁷⁾ (写真6) と市内と市内から遠く離れた郊外とを結ぶ LRT¹⁸⁾ (写真7) システムのハブとなっているからである。

KL をまだ訪れたことがなく、この記事にちりばめられたさまざまな地名や固有名称が未知な人にとっても、地理的想像力を働かせてみれば、この街が植民地都市としての経験をもち、マレー人・華人・インド系という多くの民族によってかたちづくられ、発展してきた街であること、そして近年、経済・金融のグローバリゼーションの過程の中で急速に経済成長をとげ、その街並みを急速に変貌させてきてきたことを洞察することは、さほど難しくはないだろう。

実際、1985年以来幾度となくこの街を訪れるたびに、高層ビルや KL タワーなどの高みから俯瞰し、外国人ツーリストの眼差し、あるいは遊歩者^{フラスノール}の視線で変わりゆく姿を見続けてきた筆者にとって、この街の変貌ぶりには驚嘆するものがある。とりわけ1990年代は、KL タワー、ペトロナス・ツインタワー、LRT の建設など、メガプロジェクトの同時展開の時代そのものであり、この十数年間に KL の建造環境や場所の風景は一変したと言わざるを得ない。

(2)変貌するランドスケープ：マレー・イスラム的表象の表出／ムナラ化

マラヤ連邦として独立した1957年当時、KL はゴミゴミとしたチャイナタウン、プドゥー (Pudu) 通りやかつてのバトゥ・ロード (Batu Road、現在のトゥンク・アブドゥッラー・ラーマン Tuanku Abdul Rahman 通り) 界限を中心とした低層旧市街地のひろがりの中で、スルタン・アブドゥル・サーマッド・ビルや KL 駅 (旧・KL 中央) 駅などのコロニアルな建造物が際立つ旧植民地首都としての風景を継承した。その中で、新生国家の誕生を象徴するかのよう¹⁹⁾に姿を現したのが、新開地のブキット・ビンタン (bukit = 丘、bintang = 星) 通りに建設された KL 初の近代的高層建造物、そして、本格的ホテルとしてのフェデラル・ホテルであり¹⁹⁾、同ホテルの建設を端緒として、この街は近代都市としての景観をおびはじめることとなった [Khuo 2004]。

その一方でマレーシア政府は、マレー文化 (いいかえれば「国民文化」) の振興あるいはマレー的なるものの空間的表象化を企図して、マレーの様式を近代建築に採り入れた (モダン・バナキュラリズム様式) 建造物の建設を推進した [宇高・山崎 2001]。たとえば、国立国語出版庁 (Dewan Bahasa dan Pustaka : 1959年)、国立博物館 (Museum Negara : 1963年)、プミプトラ銀行ビル (Bangunan Bank Bumiputra : 1980年)、プトラ・ワールド・トレード・センター・コンプレックス (1985年)、国立図書館 (1996年) などが建設されてきた。また、国立モスク (1965年)、KL 初のモダンな摩天楼ともいふべき35階建てのオフィスビルのダヤブミ・コンプレックス (Dayabumi Complex : 1984年、dayabumi = 大

地の力) や、旧競馬場跡地に天空を突くように屹立する20世紀における世界最高層の双塔として知られるペトロナス・ツインタワーなどに代表されるような、国教としてのイスラムの教理や文化を反映したモハマダン (Mohamedan) 建築が、KLの景観表象として立ち現れるようになり、旧植民地政庁や独立広場、チャイナタウンを眼下にみおろすように林立することとなった (表1)。

他方、1980年代に入って以降、経済・金融のグローバリゼーションの拡大・深化に伴い、KLは世界資本「蓄積の劇場」と化し [Armstrong and McGee 1985]、1990年代には、市街地の内外でメガプロジェクトが同時展開することにより、建造環境が激変する時代を迎えた。その象徴的建造物がブキット・ナナス (nanas = パイナップル) の丘上にそびえたつ KLタワー (421m、1995年) であり、またツインタワーにはほかならない。

他方、ツインタワーを中心に開発された新都心 KLCC (Kuala Lumpur City Centre) や、ブキット・ビンタン通りとスルタン・イスマイル通り界限を中心に、ブルジャヤ・タイムズ・スクエア (Berjaya Times Square) コンプレックス²⁰⁾ (写真8)、マリオット、リッツ・カールトンなどの五つ星ホテル、スターヒルズや Lot 10 などの高級ショッピング・モール街、若者や庶民が集まる BBプラザやスングアイワン・プラザなどの庶民向けのショッピング・コンプレックス、高級コンドミニウム群²¹⁾ が凝集、拡大する新繁華街「ゴールデン・トライアングル」が出現し [Morshidi and Suriati 1999] (写真9)、KLは「スクォーター都市」から「ムナラ都市」 (*menara* = タワー) へと、そのトポグラフィ (地勢) を大きく変貌させた (写真10)。そして、これらの繁華街と郊外のニュータウンや衛星都市を結ぶ高速道路や軽量鉄道 LRT、モノレールの開業も KLのランドスケープに大きな変化を与えた [藤巻2001; 2003; 2005]。

表1 クアラルンプルのランドスケープ／ランドスケープの変容過程

時代(期間)	時代背景	ランドスケープ／エスノスケープの特徴
第1期 (1957～70年) 新生国家首都建設 途上の時代	1957年：マラヤ連邦独立、初代首相ラーマン 1960年：「非常事態宣言(1948年～)」解除 1963年：マレーシア連邦結成 1965年：マレーシア連邦からシンガポールの分離独立 1969年：「5.13事件」(マレー人と華人の民族衝突)、非常事態宣言(～1970年)	旧植民地都市的景観、複合社会的・華人都市的状況の残存 マレー・ナショナリズムの沸騰 ランドスケープのマレー・イスラム化(分泌表象されるバナキュラリズム、モハマダニズム) 1965年 国立モスクの完成
第2期 (1970年代) 開発政治／プミプ トラ政策始動の時代	1970年：第2代首相ラザク就任 1971年：非常事態解除 NEP(新経済政策：～90年)施行 1974年：連邦直轄領に昇格 1976年：第3代首相フセイン就任	マレー人の都市化／華人都市からマルチエスニック都市への移行始動 マレー系スクォッターの急増
第3期 (1980年代) 世界資本「蓄積の 舞台」化／NIES 段階到達の時代	1981年：第4代首相マハティール就任(～2003年) 1983年：「マレーシア株式会社」構想/民営化発表 1984年：KL初の都市改造マスタープラン <i>Kuala Lumpur Draft Plan</i> 公表	KLのマレー人比率増大、「スクォッター都市」化の継続 1985年：ダヤブミ・コンプレックス完成、市街地改造時代の開始
第4期 (1990年代) メガプロジェクト の時代	マハティール時代の継続 1991年：「Wawasan 2020」発表 1992年：マレーシア観光振興局(Tourism Malaysia)開設 1997/98年アジア通貨危機の克服 1998：APECおよびCommonwealth Game開催	「マハティールの都市」の出現・KLのムナラ都市化/スペクタクル化 1996年：KLタワー完成 1997年：ペトロナス・ツインタワー完成 1997/98年：LRT開業 1999年：行政首都機能のプトラジャヤへの移転(～2010年完了予定) 外国人労働者の急増 再定住計画の進展に伴うスクォッターの急減
第5期 (2000年～) トランスナショナル 都市化の時代	2003年： <i>Draft Structure Plan Kuala Lumpur 2020: A World-Class City</i> 公表 2003年10月：OIC総会開催、「マハティール時代」の終焉 2003年11月：第5代首相アブドゥッラー・バダウィ就任	「ワールドクラス都市」をめざした社会環境整備の時代、美化政策の強化、スクォッター社会の解体傾向、マレー人—華人比率の均等化 2003年：KLモノレール開業 2007年1月：大観覧車(Eye on Malaysia)開業



写真8 ブルジャヤ・タイムズ・スクエアとゴールデン・トライアングル
(2007年9月10日撮影)



写真9 スルタン・イスマイル通りのホテル街、頭上をモノレールが快走する
(2003年3月26日撮影)



写真10 クアラルンプル都心部遠望、ティティワンサ湖畔より
(2003年11月24日撮影)

3. スペクタクルなツーリズムスケープの生産

(1) 「ワールドクラス・シティ」への希求

こうした建造環境の再編成、ランドスケープの変貌は、いわゆる世界資本の「フレキシブルな蓄積」[ハーヴェイ 1997 〈1987〉]によるものであることはあらためて述べるまでもない [Morshidi and Suriati 1999]。しかし、それはマレーシアという開発途上国への世界資本による一方向的な資本の流入・蓄積という図式でとらえられるべきではなかろう。すなわち、経済・金融のグローバル化を好機ととらえ、2020年までにマレーシアを先進国入りさせることを謳い、^{うな}「Wawasan 2020」(ビジョン2020)を1991年に提唱したマハティールの類まれなる政治的手腕と構想力によるものであったことを看過すべきではなかろう(彼の首相時代の功績に対する毀誉褒貶は別にしても)²²⁾。

そして、読みとらねばならないのは、急速に再編成されムナラ化する建造環境やランドスケープが単にグローバルな経済・金融の機能集積の空間的結果であることにとどまらず、同時にその壮観さ（スペクタクル）をもってマレーシアの偉容を市民・国民のみならず、外国からの来訪者に「見せる」とともに、KL という街そのものをツーリズム空間として演出することをマハティール（政権）は企図したのではなかったか、ということである。

すなわち、緑濃き熱帯の都市という「場所性」に加えて、旧植民地都市の風景を残しながらも、バナキュラリズムやモハメダニズムを意匠とした「鋼とガラスのしゃれた建造物」が林立するムナラ空間をモノレールやLRTが快走するという光景をまのあたりにさせることで、KL っ子や来訪者をして、この熱帯のメトロポリスの壮観な風景に驚嘆させ、スペクタクルなツーリズムスケープを創出することにより、マハティールは、ステロタイプ化された「後進的で猥雑な」という熱帯都市イメージを払拭させようとしたのではないか。いいかえれば、経済・金融のグローバル化を飼い馴らしつつ、国際ツーリズムの潮流にマレーシアを便乗させることによって「Wawasan 2020」を実現し、KL を「ワールドクラス・シティ」²³⁾として世界地図に刻印させることを目指してきたマハティールにとって、KL はまさに彼の企図を具現化する「空間的实践」[ル・フェーブル 2000] の場にほかならなかつたのではなからうか。

(2) 「ツーリズム・マレーシア」の唱導者マハティール

実際、1980年代末にマレーシアへの外国人観光客誘致のために Visit Malaysia キャンペーン政策を打ち出し、マレーシア観光開発公社（The Tourism Development Corporation of Malaysia：1972～92年）を改組し、1992年に観光省内にマレーシア観光振興局（Malaysian Tourism Promotion Board、通称：ツーリズム・マレーシア）を創設したのは、ほかならぬマハティールであった。ツーリズム・マレーシアは世界の主要都市に数多くのオフィスを設置するとともに、IT 立国をめざしたマハティールならではの Web 戦略によって、「ツーリ

ズム・マレーシア」の魅力の世界に向けた情報発信を促進した。さらに、豊かな自然、多彩な民族文化を観光資源とする「待ちの観光」では飽きたらず、マレー半島東海岸沖のティオマン (Tioman) 島や北西海岸沖のランカウイ島 (Langkawi、マハティールの出身地ケダー州) におけるリゾート開発など、ツーリズム空間の創出を政府主導により推進した。そして1989年の英連邦首脳会議、1998年のAPEC、2003年のOIC (イスラム諸国会議) 総会などの国際会議や、1998年のコモンウェルス・ゲーム (Commonwealth Game = 英連邦総合競技大会)、半島部マレーシアを縦断する自転車競技ツール・ド・マレーシア (1996年より毎年開催)、1997年に開港したクアラルンプール国際空港 (KLIA) 近傍のセパン (Sepang) でのF1グランプリ (1999年より毎年開催)、ランカウイ国際海洋・航空宇宙ショー (LIMA: 1997年より隔年開催) などの国際イベントを開催することにより、ツーリズム産業の振興をマハティール自らが唱導、牽引したのである。

その結果、1990年当時、マレーシアへの外国人入込客数は745万人だったが、2000年には1022万、そして2008年末には2200万人を超えるまでに至り [NST: Jan 12, 2009]、タイやインドネシア、シンガポールといった周辺諸国に後塵を拝していたマレーシアは、東南アジア最大の外国人観光客受入国となった²⁴⁾。

KL それ自体への外国人入込客数については不明だが、同国のハブ空港として KLIA を南郊に擁していることから、国全体がツーリズム空間化するマレーシアにおいて、KL がそのゲートウェイとなっていることは想像にかたくない。

(3)生産されるツーリズムスケープ

しかし、2008年7月に「マラッカ海峡の歴史都市群」としてユネスコ世界遺産に採択されたマラッカとペナンに比べた時、KL は歴史 (遺産) 都市としての資質は乏しく、KL の市内観光といえば、白と緑のツートンカラーの Bas

Persiaran（観光バス）とかかれた大型バスやバンに乗車し、KLタワーやツインタワーを車窓から眺めながら、北郊に位置するヒンドゥー教の聖地バトゥ・ケーブ（Batu Cave）、スランゴール・ピュータ（Selangor Pewter）の工場、古びたゴム園、国家元首の王宮イスタナ・ヌガラ（Istana Negara）、国立モスク、KL 駅・旧植民地政庁・ムルデカ広場を巡る、というコースが定番でしかなかった。

そこでKL市庁を通じて打ち出されたのが、「5.13 民族衝突」（1969年5月13日のマレー人と華人との衝突という忌まわしい事件）の舞台となった多民族都市KLの、マレー・中国・インド系など多様な民族が共生する多民族文化都市への読み替えであり、チャイナタウンやコロニアルな雰囲気を残す市街地に残されてきた建物の歴史的遺産としての「再発見」とそれらの保存・修景計画であった。

歴史的遺産の重視はアーバン・ツーリズム戦略の一環でもあるが、同時に、KL市民のアイデンティティ涵養策としても動員されている。たとえば、KL市長は広報誌²⁵⁾や新聞紙上においてKLの歴史を振り返りながら、連邦政府の指導のもと、市政をあげて歴史的遺産を保存修景すること、そうした遺産の意味や価値の学びを通じて、KLに対して誇りを持ち、帰属・共属意識を高めよう、とKLっ子に呼びかけている。

加えて、歴史都市（旧植民地都市）と近代都市としての要素が調和する常夏の緑濃き「美しい庭園都市」の創造と、街並みの「エステ化」（美化）が推進されてきた（写真11）[藤巻 2003]。

熱帯の「美しい庭園都市」創造の動きは、すでに1980年代後半から、官製「美化運動」のかたちをとってあらわれていた。たとえば、1989年の東南アジア・スポーツ大会や英連邦首脳会議、1990年のマレーシア観光年をひかえて、マハティールは次のようにKL市民に対して訴えたことがある。

KLを世界で最も美しい都市だと知られるように、ゴトン・ロヨン（藤



写真11 エステ化されるチャイナタウン (2004年1月22日撮影)

巻注：gotong-royong = マレー人社会における伝統的相互扶助慣行) 精神で実現に向けて努力する必要がある。.... 【NST: 21 November, 1988】

また KL 市長も自ら街頭視察を行ない、美化運動率先唱導の姿勢を示威し、「見苦しいもの」の除去に市民も協力すべき旨、呼びかけている。

(1989年) 10月には東南アジア・スポーツ大会および英連邦首脳会議が開催される。さらに12月からはマレーシア観光年の事業も始まる。....KL 市長は「見苦しいもの」を一掃し、美化につとめる市内美化プログラム推進のためトイレ、裏通りなどを視察した。.... 同市長は、イスタナ・ヌガラという崇高なる場所の向かい側の遊休地にスコッター集落が存在していることを嘆く 【MM: 16 June, 1989】

こうした官製美化運動は、国際会議や大がかりなスポーツ・イベントがKLで開催される頻度が増すようになった1990年代において、よりいっそう強化された。たとえば、第16回コモンウェルス・ゲームとAPECとが開催された1998年には、新聞やTVなどのマスメディアを通じて、美化キャンペーン「Beautification and Landscaping KL」が連日のように繰り返され、河川や排水溝などへのゴミ不法投棄に対する監視や、露天商や屋台商の管理・取り締まりの強化、ゴールデン・トライアングルやチャイナタウンなど繁華街の表通りに面する老朽建造物の補修整備、壁の塗り替えを所有者へ通告することなど、政府およびKL市庁は市民に対して「美しいメトロポリス」の創造への参加を呼びかけたものである【MM: August 19, 1998】。

他方、美化政策は外国人観光客が集まる地区の改造プログラムとも連動するものであった。たとえば、「シャンゼリゼー (Champs-Elysees) 化」プロジェクトにより、ビンタン・ウォーク (ブキット・ビンタン通りやスルタン・イスマイル通り境界) では (写真12)、遊歩者と視線を交わしながら、街のざわめきやライブ演奏がたのしめるカフェテラスやドリンクバーがあちこちに配置され (政府は外国人観光客向けに深夜2時まで営業時間を延長するよう呼びかけた)、日が暮れると電飾塔と化するツインタワーやKLタワーとともに表通り一帯はイルミネーション・モールへと改造された。あらためて述べるまでもなく、こうした観光客スケープの創造は、外国人観光客に熱帯都市の夜を満喫してもらおうという政府やKL市庁の構想にもとづいている。

また、KLにとって重要な観光資源であるチャイナタウンも、2000年頃から急増し始めたアラブ人観光客をはじめとする外国人観光客にとって、あくまでも喧騒猥雑なチャイナタウンであらねばならないのだが、老朽化した建物は修復され、ペタリン通りはアーケード化されるなど、かつてはゴミが散乱し悪臭漂う屋台街も衛生管理行き届いた観光スポットへと変身をとげた。

以上に点描してきたKL美化・スペクタクル化は、外国から観光客を招き入れ、外貨獲得のための戦略であるだけでなく、KLを「一等国」の首都あ



写真12 ビンタン・ウォーク (2004年8月18日撮影)

るいはワールドクラス・シティへと「昇格」させることをねらったマハティールの企図を反映したものにほかならない。その意を受けて KL 市長は「Wawasan 2020」にかかわって、2020年までにあらゆる面で KL を「ワールドクラス・シティ」の水準に高めるべく「安全な都市」「都市の緑化」「衛生的な都市」「川を愛そう」キャンペーンを展開していくことを公表している [Kuala Lumpur City Hall 2003]。

4. 「マハティールの都市」の光と影

こうして、マハティールによる KL 改造・美化プロジェクトは、国民に対しては首都 KL の偉容を「見せる」ことにより、自国の繁栄に自負の念を醸成させ、自国の経済発展へと導いた政府（指導者）の力量を知らしめるとともに、外国からの賓客や観光客に対しては、マレーシアが「ワールドクラス」の国と



写真13 ティティワンサ湖畔の大観覧車（2008年8月29日撮影）



写真14 街角の露天商（2005年6月1日撮影）



写真15 追立てに抵抗するスクォッター家屋 (2008年8月28日撮影)



写真16 ブキット・ビンタン裏通りの雑居ビル (2008年8月28日撮影)

しての地位にあることを知らしめる、という示威的意味をはらんだものであった。そういった意味において、KLは「マハティールの都市」と呼ばれるべきであろう。

マハティールは2003年10月末に首相の座を降りたが、2007年1月に新たな観光名所として大観覧車 (Eyes on Malaysia : 写真13) が市街地北西のティティワンサ (Titiwangsa) 湖畔に出現したように、刷新・生産され続けているランドスケープ、ツーリズムスケープを経験・消費した人々によってKLの名は記憶され、世界に伝播されていくことであろう。

しかし、ツーリズム空間の生産、ワールドクラス・シティへの格上げを目指したマハティールによるプロジェクトとその空間的实践は、露天商・屋台商を路上から追い立て (写真14)、ツーリズム空間拡大のために貧困の空間的表象、環境破壊者と眼差されてきた「見苦しい」スクォッター集落を撤去し、住民を立退かせ、遠めには美しい低価格高層フラットへの再定住を伴うものであったことに思いをはせるべきであろう [藤巻 2001]。

今なお、高架モノレールやLRTの車窓から、またKLタワーやホテルの高みから、ビル街の「すき間」や郊外に「他なるあわいの空間」(places in-between)、「ヘテロトピア」(heterotopia: out of place)²⁶⁾としての「村」(カンボン)的残滓を看過するわけにいかない(写真15)。「空間の表象」としての「マハティールの都市」に対抗する「表象の空間」[ルフェーブ 2000]に生きるスクォッターの抵抗は、いまだ完全に潰^{つぶ}えていないということであろう。さらには、繁華街の路地裏の雑居ビルや中・低層アパートには、外国人出稼ぎ労働者たちが共同生活をおくる生活世界が無数に埋め込まれていることにも思いをはせたい(写真16)。そうした断片的「すき間」に暮らす人々によって、KLのツーリズム産業そしてワールドクラス・シティKLそのものが支えられているからだ。

注

- 1) 英領マラヤ時代におけるKLの歴史に関して多数の著作を公刊してきたガリック(J. M. Gullick)は、「マレー語でいうKualaとは川の終点を意味しており、それに従

えばクラン川に合流するゴンバック川の終点こそがこの合流点にあたるのだから、Kuala Gombak と称すべきであること。また、Lumpur は泥の名詞や形容詞にあたるが、マレー語では Kuala Lumpur というような語順での用法は稀であるとされている。Lumpur はむしろ「密林」を意味する中国語の転訛したものであろう」と、「Kuala Lumpur = 泥川が合流するところ、河口」との通説に疑問をなげかけている [Gullick 2001 (1994): 4]。また、マラヤ大学のクー (Khoo Kay Kim) 教授は、近代以前の地図では、泥川 Lumpur River (*Sungai Lumpur*) という名称は示されていない。しかし、マレー半島西海岸のスズ産出地域に関する1824年の刊行物では、Lumpur River についてふれられており、あるレポートに添付されているスケッチでは、クラン川と合流する川 (今日のゴンバック川) が、Lumpur River として表記されているという [Khoo 2004]。なお、ガリックによる英領マラヤ時代における KL をテーマにした歴史作品には以下がある。'Kuala Lumpur 1880-1895', *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol.28, Pt.4, 1955, *The Story of Early Kuala Lumpur*; Donald Moore, 1956, *The Story of Kuala Lumpur (1857-1939)*, Eastern Universities Press, Singapore, 1983, *Old Kuala Lumpur*, Oxford University Press, 2001 (1994)。

- 2) 公式統計によれば、2002年時の KL 人口は約200万人である。
- 3) 19世紀末、英領時代に建設された英国理事官など高級行政官やスルタン、貴族などの上層社交クラブ。
- 4) 1897年に完成したムーア風レンガ造りの旧植民地政庁、現在は連邦高裁。赤銅色のドーム屋根の時計塔 (41m) が目を引く。半日・一日市内観光のスポットとなっており、夜のライトアップサービスも人気を呼んでいる。目の前のムルデカ広場とともにしばしば、独立記念式典の会場となる。
- 5) 421m。1996年完成。テレコム・マレーシア社の通信塔。展望台からは360度、KL を鳥瞰できる。
- 6) 1997年1月に完成した高さ452mの双塔は、2003年に台北国際金融センター「台北101」に世界一の座を譲るまで世界第1位の高さを誇っていた20世紀における最高の建造物である。88階建てのツインタワーはマレーシアの国営石油会社ペトロナスの本社などが入るオフィスビルであり、ISETAN や KINOKUNIYA などが入居する KL でも最大・最高級のショッピング・モール Suria KL も併設され、地元客のみならず、外国人観光客のショッピングスポット、そして休日には外国人労働者集合の場ともなっている。
- 7) こうした意匠の建築様式はモハマダン (mohamedan) 様式と呼ばれる。マレーシア建築教会の定義によれば、モハマダン建築とは「ヨーロッパの建築様式やモダン建築にイスラム的要素が積極的に導入されたもの」である [宇高・山崎 2001: 3]。マレーシアの建築様式の分析を通して、マレーシア社会のコロニアリズムからマレー・ナショナリズムへの推移を読み解いた宇高・山崎 [2001] によれば、マレー

シアの建築様式は英国留学組が導入したモダニズム、イスラム的デザインを採り入れたモハマデニズム (Mohamedanism)、そして伝統的マレー建築様式の要素を採り込んだバナキュラリズムに影響されているという。

- 8) 高さ310m、1996年完成。
- 9) KLの一大繁華街ブキット・ビンタン、ペトロナス・ツインタワーを核として旧競馬場跡地に開発された新都心KLCC (KL City Centre) を中心に、おおよそ北辺をトゥン・ラザク (Tun Razak) 通り、西辺をアンパン (Ampang) 通り、南辺をスルトン・イスマイル (Sultan Ismail) 通りとする三角形のKLの新都心域を指す (実体としては矩形化しつつある)。
- 10) KLの一大観光スポット。夕方から通りを埋めつくす屋台と観光客とでごった返す。まがい物の衣服・カバン・時計・DVDなどを売るのは地元民だけでなく、近年ではバングラデシュやインドネシアなどからの外国人労働者でもある。1990年代末以降、観光資源としての唐人街の面影を残すべく、老朽化したショップ・ハウスの保存・修景・美化計画が進められており、2003年からプタリン通りはアーケード街となった。KLは19世紀半ば以降、この唐人街を中心に発達した。チャイナタウンをKLの歴史遺産とする市政府の方針と歩調をあわせるように、その最初期の発展に貢献し、華僑社会の頭目 (カピタン) だった客家系華僑の葉亜来 (Yap Ah Roy) を称えて、プタリン通りを「ヤップ・ア・ロイ通り」に改称する動きがある。
- 11) インド系イスラム礼拝所 (*masjid*) であるマシジッド・インディアを中心として、トゥンクラー・アブドゥッラー・ラーマン通り沿いに発達したKLのリトル・インディア。
- 12) カンボン (*kampung*)・バル (*baru*) とは、マレーシア語でそれぞれ「村」と「新しい」、つまり「新村」を意味する。1899年、「マレー人保留地^{リザーブ}」として設定された農業集落。英領時代最初期、イギリス人のみならず、華僑・インド系などの移民が流入していくなか、マレー人の土地が蚕食されないようにマレー人のみが入植・居住できる空間として設けられた。今日まで保留地としての特権は認められ、周辺部において開発が進むなか、高床式木造の伝統的なマレー家屋が今なお広く見られ、「都会の中の村」的景観を残している。近年、連邦政府およびKL市庁は都心周辺部に位置するカンボン・バルを再開発可能な空間にすべく法の改正を進めつつあるが、2004年来、その賛否をめぐって住民の反応は分かれている【NST: 20 Aug 2004: Commercial value of Malay reserve land set to soar with amendments】、【Star [Metro]: 27 Aug 2004: Village's dilemma: Village suspended between two worlds】ほか。
- 13) ブリックフィールズは、英領時代に鉄道関連部門に深く関わったインド系職員や労働者がKL鉄道駅を中心に集住した地区である。このほかに、市街地北部のセントゥール (Sentul) の操車場・作業所付近もインド系色の強い区域となっている。
- 14) ムーア様式の建物で知られる1910年建設の旧中央駅の南に2001年完成。マレー鉄道

- (Keretapi Melayu = KTM)、LRT、KL モノレール、ERL (注16) の統合駅。
- 15) マレー鉄道 (KTM) は、クアラルンプル大都市地域の旅客輸送の効率化をめざし、1990年代半ば以降、KL を中心にクラン、セレンバンなど郊外市を結ぶ4路線を複線化した。
 - 16) KLIA Ekspres と呼ばれる。1997年開港のクアラルンプル国際空港 (KLIA) と KL セントラル (中央駅) とを直結、28分で結ぶ2002年開業の高速鉄道。
 - 17) 2003年開業。チャイナタウン～ブキット・ビンタン～チョウ・キット (Chow Kit) などの主要繁華街を結んでいる。
 - 18) 市街地内の深刻な交通渋滞を緩和するために建設された1998/99年全線開業の Star および Putra2 社による3路線の新鉄道システム。KL モノレールと同様、市街地内は高架となっている。Star 社は KL 北西郊外のニュータウンのセントウル (Sentul) と南東郊外のニュータウンのアンパン (Ampang) および西郊外のブキット・ジャリル (Bukit Jalil) とを結ぶ。Putra 社の無人 LRT は、北西郊外の衛星都市プタリンジャヤ (Petaling Jaya) と北東郊外のニュータウンであるワンサ・マジュ (Wangsa Maju) とを結んでいる。
 - 19) マラヤ連邦の独立した年に「連邦 (フェデラル)」の名前を冠したこのホテルが落成した頃の「星が丘 (ブキット・ビンタン)」は、スクオッター集落を周辺に残す街はずれの新開地であった。その後、ブキット・ビンタン通り境界は、チャイナタウンを中心とする旧市街地に代わる一大繁華街 (ビンタン・ウォーク) へと変身をとげたのである。
 - 20) 2004年に KL モノレールの IMB 駅前に完成した47階建ての2つのタワーから成る U 字形の複合ビルであり、ホテルやオフィス、ショッピング・モール、映画館、アミューズメント・パークなどが入っている。
 - 21) マレーシア有数のコングロマリットで不動産分野でも台頭をみせている YTL グループ社の配信ニュース (YTL Community News: Fri. 18 Apr., 2008, “The View from Kuala Lumpur”) によれば、オフィス機能やさまざまなサービス機能が集積し続ける KL 市街地の中であって、近年 KLCC では地元民あるいは外国人ビジネスマンを問わず、富裕層をターゲットにしたサービス・アパートメントやコンドミニアムの建設ブームが沸騰しつつある。実際、ペトロナス・ツインタワーが建設される前の1995年当時、KLCC にはわずかに6件の開発プロジェクト、928戸のサービス・アパートメントしかなかったが、2007年には27プロジェクト、新たに8000戸の建設があり、しかも向こう3年以上の間に、6000戸の新規建設計画が浮上しているという。
 - 22) マハティールの強権的開発政治、その政治哲学や手法に対する批判も多い。マハティールによる20年余りの治世を回顧した Welsh, B. 編の論集 [2004] を参照。
 - 23) KL 市庁は、1984年に同市初の都市改造マスタープラン (*Kuala Lumpur Draft Plan*) を公表してから20年後の2003年に、*Draft Structure Plan Kuala Lumpur 2020: A World-Class City* を打ち出した。前者は旧植民地都市から近代都市への脱皮をはか

- る構想であったが、後者は2020年に先進工業国入りすることを目指す国家の首都にふさわしい都市建設基本計画書として位置づけられる。
- 24) 世界観光機関 (UNWTO) 『2005年国際観光概観』によれば (<http://nippon.zaidan.info/library/>)、2005年の「旅行国目的地世界上位40カ国・地域」(国際観光客到着数)では、マレーシアは世界第13位(1640万人)でアジアでは中国(第4位)に次ぐ集客力を有している。なお、タイは1160万人で第19位、シンガポールは710万人(第29位)、インドネシアは500万人(第38位)となっている。ただし、国際観光収入からみた場合、マレーシアのそれは85億米ドルで世界第20位である(タイは96億米ドル(第19位)、シンガポール57億ドル(第30位)、インドネシア45億ドル(第40位))。
- 25) *Kuala Lumpur City News: Federal Territory Day Special Issue*, 1/January 2004 pp.1-5.
- 26) ヘテロトピア (heterotopia) とは、フランスの思想家フーコー (Foucault, M.) による概念であり、地理学的には「... 社会生活のもうひとつの空間性、すなわち『外の空間』...それは現実には生きられる(そして社会的に生産される)いくつもの場からなる空間...」[ソジャ 2003: 22]、「他者性をはらんだ場所」(a place of Otherness)、「他なる空間」(other spaces)を意味する「ハイブリデティ(異種混濁)空間」(a space of hybridity)、として解釈されてきた。また、文化人類学者の関根康正 [2004: 6-15] は、ヘテロトピアは全体主流社会の支配的原理・道徳・価値観・規準から逸脱した異質な、排除されるべき場所と眼差される、しかし前者の「暴力」に対抗する力を秘めた場所を含意していることを紹介し、「異域」、「差異化空間」、「差異の現前」という訳語をあてている。

〈引用・参考文献〉

日本語文献

アルジュン・アパデュライ (門田健一 訳)

2002 「グローバル文化経済における乖離構造と差異」『思想』933: 5-31 (原著 Arjun Appadurai, "Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy", *Public Culture* 2-2, 1990, 1-23: Chapter 2 in *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press, 1996)

宇高雄志・山崎大智

2001 「マレーシアの現代建築の成立過程におけるナショナリズム」『国際協力研究誌』(広島大学大学院国際協力研究科) 7-1: 1-17。

エドワード・W・ソジャ

2003 『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相——』(加藤政洋 ほか訳) 青土社: 22-29。

大阪市立大学経済研究所監修、生田真人・松澤俊雄編

2000 『アジアの大都市 [3] クアラルンプル・シンガポール』日本評論社。

関根康正編

2004『〈都市的なるもの〉の現在——文化人類学的考察——』東京大学出版会。

「地球の歩き方」編集室編

2007『地球の歩き方 D19 マレーシア・ブルネイ (2008~2009年版)』ダイヤモンド・ビック社。

ハーヴェイ, デイヴィド (加藤政洋・水内俊雄訳)

1997「都市空間形成を通じてのフレキシブルな蓄積—アメリカ都市における『ポスト・モダニズム』に関する省察—」『空間・社会・地理思想』2: 19-35 (原著 David Harvey, “Flexible Accumulation through Urbanization: Reflections on ‘Post-modernism’ in the American City”, *Antipode* 19, 1987, 260-286.)

藤巻正己

2001「KLの都市美化政策とスコッター—新聞記事に描かれたスコッター・イメージ—」(藤巻正己編『生活世界としての「スラム」—外部者の言説・住民の肉声—』古今書院) 60-93。

2003「熱帯のメトロポリス KL断章—スコッター都市から世界都市へ?—」『地域研究論集』(国立民族博物館) 5-2: 79-93。

2005「1970年代におけるクアラルンプルの社会地理—Dietrich Kühne “*Vielvölkergesellschaft zwischen Dorf und Metropole: Fortentwicklung und neue Wege der Urbanisation in Malaysia (1970-1980)*” の紹介と検討—」『立命館地理学』17: 55-77。

2006「グローバル化するクアラルンプル周辺地域のオランアスリー—半島マレーシア先住民社会の現在と彼らの場所をめぐるせめぎあい—」『立命館文学』593: 69-91。

2007「トランスナショナル都市化するクアラルンプル—変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観—」『立命館地理学』19: 1-19。

ルフェーブル, H. (齊藤日出治訳)

2000『空間の生産』青木書店。

外国語文献

Armstrong, W. and McGee, T.G.

1985 *Theatres of Accumulation: Studies in Asian and Latin American Urbanization*, Methuen.

Bunnell, T. and Nah, A.M.

2004 Counter-global Cases for Places: Contesting Displacement in Globalising Kuala Lumpur Metropolitan Area, *Urban Studies* 41-12: 2447-2467.

Gullick, J.M.

2001<1994> *Old Kuala Lumpur*; Oxford University Press.

Khoo Kay Kim

2004 Kuala Lumpur from trading depot to modern metropolis', *Kuala Lumpur City*

News: Federal Territory Day Special Issue, 1/January, 1-5.

Kuala Lumpur City Hall (Dewan Bandaraya Kuala Lumpur)

2003 *Draft Structure Plan Kuala Lumpur 2020: A World-Class City*.

Morshidi Sirat and Suriati Ghazal

1999 *Globalisation of Economic Activity and Third World Cities: A Case Study of Kuala Lumpur*; Utusan Publications and Distributors.

Welsh, B. ed.

2004 *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University.

* 文中で略称した新聞紙名は以下の通りである。MM : *Malay Mail*、NST : *New Strait Times*、NSUNT : *New Sunday Times*、Star : *The Star*

(藤巻 正巳、立命館大学文学部教授)